総論

なぜ「くずし字教育」が必要なのか

飯倉洋一（大阪大学名誉教授）

1 はじめに

ここ一〇年ほど、「くずし字」解読に対する関心が広がるとともに、AIによるくずし字認識技術も急速な進化を遂げています。このような「くずし字」解読への追い風現象を紹介するとともに、なぜ「くずし字教育」が必要なのかという逆風への回答も考えたいと思います。

「くずし字」という言葉を使うこと、濫用することに批判的な人もいますが、「くずし字」は、アカデミアでも広く使われ、定着している言葉なので、本章でも「くずし字」を用います。

「くずし字」とは、変体仮名を含めて、漢字をくずした文字のことで、特に前近代の古文書（こもんじょ）・古典籍（こてんせき）で用いられています。

「くずす」とは、渡辺麻里子さんの「くずし字三ケ条」によれば、「つなげる・なめらかにする・簡単にする」ということ（渡辺麻里子「くずし字を知ること―日本古典文学の基礎学を考える」、荒木浩編『古典の未来学』文学通信、二〇二〇年）です。

私自身、「くずし字教育」の普及活動に微力ながら関わってきました。その経験をまず述べるところから始めたいと思います。

2 「くずし字教育」と私

①日本近世文学会での和本リテラシー啓蒙活動　私の師である中野三敏先生は、二〇一〇年ころから、「和本リテラシー」という造語で、「くずし字」解読能力の必要性を説いていました。その主張は『和本のすすめ』（岩波新書、二〇一一年）にまとめられました。「和本リテラシー」とは、江戸時代以前に手写または出版され、「くずし字」で書かれた本を読む能力のことです。その能力のある人は、現在の日本には数千人程度しかいないのではないかという強い危機感を中野先生は持っていました。

なぜ、「和本リテラシー」が必要なのか。江戸時代以前の本は一〇〇万点くらい残っていると推測されますが、そのうち活字になっているのは、三％くらいでしょう（中野先生は一％と言われますが、もう少し多いと私は思います）。しかし、活字になっているものは、近現代の資料価値観の枠組みで選ばれたものです。成熟した社会を目指すためには、その枠組みから抜け出し、新たな認識の枠組みをつくる必要があります。そのためには、活字になっていない典籍を読む必要があり、「和本リテラシー」が必要になってきます。これが中野先生の主張の概要です。

中野先生は、二〇一一年五月に、日本近世文学会宛に要望書を提出しました。その要旨は、「近代主義の行き過ぎを是正するためのヒントは、近代主義が否定した江戸時代にこそある。江戸時代を理解するためのツールは、「和本リテラシー」以外にはない。「和本リテラシー」回復のために、日本近世文学会で、その啓蒙に取り組んでほしい」というものでした。この時私は同学会の事務局を務めていました。日本近世文学会とは江戸時代の文学を研究する研究者コミュニティーで、当時の会員は約八〇〇名でした。

学会では要望書を受けて、広報企画委員会の中に「和本リテラシー部門」を設置、学習指導要領の範囲で、どのように「和本リテラシー」教育を行えるかを模索しました。二〇一三年には「くずし字教育」に関するシンポジウムを

開催し、それに基づくアンケート報告会と討論を経て、ニューズレターの刊行を決定、二〇一五年七月にフリーマガジンの「和本リテラシーニューズ」第一号を刊行したのです。同誌はウェブでも公開され、二〇二〇年一月には第五号を刊行しました。一方で、学会員による、各地の小・中・高での出前授業を積極的に展開しました。

②京都大学古地震研究会の活動　京都大学古地震研究会は、二〇一二年四月京都大学大学院理学研究科の中西一郎教授（現名誉教授）の呼びかけによって有志が集った学際的な団体です。その目的は地震をはじめとする過去の自然災害についての研究を進めることで、古文書解読の実習や実践を中心とした勉強会を毎週開いていました。二〇一四年九月、私は中西先生の依頼により、同会の夏合宿に呼ばれ、「刊本と写本」について講演をしました。実は中野三敏先生のピンチヒッターでした。ここで私は理系研究者も「くずし字」解読を必要としていることを知り感銘を受けました。当時京都大学の教員であった地震研究者の加納靖之さん（現東京大学）、院生であった人文情報学研究者の橋本雄太さん（現国立歴史民俗博物館）とも出会い、懇親会では「くずし字学習支援アプリＫｕＬＡ（クーラ）がリリースされるなどとは、この時点では思いもよりませんでした。実現すれば面白いよね、くらいの雑談だったと記憶します。

③ＫｕＬＡ開発までの流れ　折しも国文学研究資料館（以下、「国文研」）では、歴史的典籍ＮＷ事業と称する、三〇万点の歴史的典籍画像公開計画が始まろうとしていました。大阪大学が事業を推進する拠点校の一つとして選ばれ、私は拠点代表として、何らかのプロジェクトを考えることになりました。そこで思いついたのが画像をより活用していただくためのサポートプロジェクトです。その時点では「くずし字学習支援アプリ」の開発まで考えていなかったのですが、橋本さんとの出会いでにわかに現実化してきました。しかし、当初拠点校には一〇〇〇万円くらいの予算が降りてくるという話もあったのですが、それは泡と消え、一〇分の一くらいに縮小され、計画は宙に浮きそうになりました。幸い大阪大学からも支援を受けられることになり、また国の助成金である科研の挑戦的萌芽研究への応募も

採択されて、二〇一五年度から、橋本さんをシステム設計者としてお迎えし、「くずし字学習支援アプリ」の開発が始まりました。今思えば、開発のための環境がタイミングよく整ってきつつありました。二〇一五年一一月、国文研は無条件で利用できる三五〇点の古典籍オープンデータセットを公開しました（現在は三〇〇〇点以上が公開されています）。国立国会図書館や早稲田大学、立命館大学をはじめとする内外の古典籍のデジタルアーカイブも充実してきていました。同年一〇月には、国立国語研究所が「学術情報交換用変体仮名」セットを試験公開しました。これは変体仮名がワープロやスマホで打てるようになるということでした。戸籍などの行政実務において変体仮名の文字コード標準化のニーズがあり、日本語の文字表記史や日本史学の学術用途においても、変体仮名をコンピューターで扱うニーズがあるという理由からでした。チームの一員であった当時大阪大学准教授の矢田勉さん（現東京大学）がもたらした情報でした（高田智和・矢田勉・齋藤達哉「変体仮名のこれまでとこれから　情報交換のための標準化」、『情報管理』五八―六、二〇一五年九月）。このような偶然が重なり、アプリ開発の環境が急速に整ったのは、やはり運命だったのかもしれません。開発の経過はツイッターでも発信され、テスターの募集も行いました。私たちにとって意外だったのは、刀剣乱舞という人気ゲームのユーザー（いわゆる刀剣クラスタ）が強く興味を示してくれたことでした。刀剣を深く知ろうとすれば、古文書を読む必要があるからでした。KuLAの練習用テキストに江戸時代の刀剣書が入っているのはそういうニーズに応えたものでした。

④くずし字学習支援アプリKuLA　KuLAは、Kuzushiji Learning Application の略称で、字形学習・読解練習にコミュニティー機能を備えた「くずし字」学習の総合支援モバイルアプリケーションです。二〇一六年二月一七日に行われた国際シンポジウム「読みたい！　日本の古典籍」で発表され、翌日リリースされました。二〇二二年の現時点で約二〇万回ダウンロードされています。もともと、「くずし字」を学びたくても、「くずし字」学習本や、くずし字辞典の類を入手することが困難な海外の方を利用者に想定したものです。「まなぶ」「よむ」「つながる」の三

つのモジュールからなります。「まなぶ」モジュールでは、ゆるキャラ「しみまる」による、「くずし字」解読の基礎知識解説と、三〇〇〇件の用例を用いた字形学習、どのくらい力がついたかを自分で確かめられるテスト機能があります。用例は、国文研のデータセットから収集しています。「しみまる」は『和本リテラシーニューズ』の公式マスコットで、ユーザーとシステムの間をつなぐ役割を担っています。「よむ」モジュールでは、実際の和本を利用した読解練習ができます。本アプリは海外の日本研究者を想定して開発されましたが、海外で日本古典のテキストとしてよく読まれている『方丈記』、なぞ解きを楽しみながら学習できる『新版なぞなぞ双六』、刀剣クラスタの利用を念頭に置いた『新刃銘尽後集』を収録し、全作品に翻刻文を付しています。「つながる」モジュールは、このアプリで学習する仲間で情報交換や交流を促すネットワークシステムです。例えばスマートフォンのカメラで資料を撮影し、他のユーザーに読み方を教えてもらうなどの教え合いができます。SNSアカウントがあれば誰でも利用可能です。なお、KuLAの使い方については、飯倉洋一編『アプリで学ぶくずし字　くずし字アプリKuLAの使い方』（笠間書院、二〇一七年）というガイドブックも出版されています。

3　IT時代の「くずし字教育」

①教材としてのKuLA　『アプリで学ぶくずし字』には、大学の授業でのKuLAの活用についての経験談を語る慶應義塾大学の合山林太郎さんの報告が掲載されています。教員は、簡単な説明で導入可能であり、「まなぶ」モジュールのクイズ機能を用いて課題を出せます。全問正解した場合「全問正解」のスタンプが押されるため、到達度のチェックが簡単です。問題は一四回分（各回二〇問程度）あるため、一セメスター（一五回）で、「くずし字」を攻略するのにちょうどよいのです。一方、学生はキャラクターの「しみまる」を「かわいい」と楽しみながら、通学電車や、待ち時間

に学習することができます。もちろん、全回を全問正解したからといって、「くずし字」で書かれたテキストがすらすら読めるようになるわけではありません。あくまで「くずし字」解読の基本中の基本が習得できるということです。このような使い方に典型的なように、KuLAは、「くずし字教育」の必須ツールとなり、初学者用の定番自習教材として知られるようになりました。

②みんなで翻刻　さて、KuLAリリースの翌年、京都大学古地震研究会は、「みんなで翻刻」というプロジェクトを開始しました。「みんなで翻刻」は多数の人々が史料の翻刻に参加することで、歴史資料の解読を一挙に推し進めようとするプロジェクトです。当初は地震史料の翻刻が目的でしたが、予想をはるかに上回るペースで翻刻が進み、料理本や医学本、仏典（ぶってん）、草双紙（くさぞうし）など、さまざまな資料が投入され、それぞれの翻刻プロジェクトが走っています。二〇二二年九月時点で、参加登録者は二二〇〇名を超え、一八〇〇万字以上が入力され、翻刻完了史料は一四〇〇となっています。一人で一〇〇万文字以上入力した人が四人もいるのは、驚きを超えて信じられません。翻刻初心者も参加できるように、システムの中にKuLAが組み込まれ、AIくずし字認識システムが翻刻を援助してくれる仕組みも導入されています。KuLAをマスターしたら、その次の自習教材として「みんなで翻刻」は最適です。その教材としての利点は、①好きな資料が選べる。②好きな時間に翻刻作業ができる。③先生に聞かなくてもAIが読解を助けてくれる。④間違いを誰かが修正してくれる。⑤入力文字数やランキングで成果が可視化される。⑥「みんなで」やる一体感がある、などです。

③AIくずし字認識アプリ　立命館大学アートリサーチセンターは、凸版印刷の人工知能による深層学習を使い、「くずし字」解読支援・指導システムを開発しました。読めない字を画面上で選択すると、AIが読むのを手伝ってくれるのです。それでも読めなかった文字のみ、教員から指導してもらえばよく、教員の負担も少なくなります。効率的な学びが可能になります。人文学オープンデータ同利用センターのカラーヌワット・タリンさんは、AIが「くずし字」

文献をある程度読んでしまうという、くずし字AI認識アプリ「みを」を開発しました。スマホやタブレットで「くずし字」文献の読みたい部分を撮影すれば、ボタン一つでAIが解読し、翻刻本文までつくってくれるのです。これは初心者向けというよりも、中級者向けかもしれません。AIにまず読ませて、読み誤った部分や読み残した部分を翻字すればよく、省力効果があるというわけです。「みを」の解読能力はまだまだ高いとは言えませんが、どんどん向上していくことは間違いありません。しかし、どんなに解読能力が向上しても、人間の眼による確認は必須であり、すべてをAIに任せるという時代が来るというわけではありません。

4　なぜ「くずし字教育」が必要なのか

①なぜ「くずし寺教育」が必要なのか　先述したように、中野三敏先生は、翻刻された資料は、近現代の価値観から選ばれたものであり、現在翻刻されていない資料にこそ「近代」を相対化し、考え直すヒントがあると言い、翻刻されていない資料を読むには、「くずし字」を読解するスキル、すなわち「和本リテラシー」が必要であるとしました。

そもそも、歴史的典籍は、その時点で「未来の人」に向けて書かれたものです。歴史的典籍を書いた人にとっての「未来の人」とは私たちに他なりません。私たちは歴史的典籍というタイムマシンに乗って、古人と出会い、対話することができます。そのタイムマシンの操縦術がすなわち「くずし字」リテラシーなのです。私たちも、私たちにとっての「未来の人」に歴史的典籍をつなぐ義務があります。

現存する歴史的典籍（古典籍および古文書）は、それだけで読む価値があると判定できます。かつて存在した無数の歴史的典籍は、多くは消失し、廃棄され、散佚（さんいつ）しました。その中のごく一部が保管され、伝存して現在にいたっています。つまり現存する歴史的典籍は、偶然に残っているわけではなく、残そうとする人々の意志があったからこそ残っ

ているのです。後世に残すだけの価値があり、読まれる意義があり、利活用できると思われたからこそ、現存しているのです。

②「くずし字教育」への疑問に答える1　しかしただちに、次のような疑問が突きつけられるでしょう。すなわち、「活字だけでも一生かかっても読みきれないくらいの数があるのに、未翻刻の文献まで読んでいる時間はないでしょう？」と。それに対しては次のように答えましょう。「いいえ、あなたの人生で出会う古文書や古典籍があるとすれば、あなたの今後の人生に大きく関わる可能性があり、しかもそれは翻刻されていない可能性が高いです。あなたがくずし字解読スキルを身につければ、それが読めるのです。あなたは、自分の可能性を開くことができるのです」と。

例えば、自分の住む地域の過去の地震や洪水に対し人々はどう行動したのか、調べたい時、江戸時代、明治時代に書かれたこの地域の住民の日記が残っていて、そこに手がかりがありそうだとすれば、「くずし字」を読んで、その欲求をかなえることができます。日記や手紙などは、少なくとも昭和前期までは、「くずし字」で書かれていることが少なくありません。一〇〇年もたっていない過去が、「くずし字」を読めないだけで知ることができないというのは、あまりにももったいないです。

③「くずし字教育」への疑問に答える2　あるいは、このような疑問もあるかもしれません。「くずし字を読めても、古文（文語文）が読めなければ、意味がわからないでしょう？　「くずし字教育」よりも古文教育をどうするかの方が喫緊の課題では？」と。その疑問に対しては、逆に次のように問いたいと思います。古文教育の中に「くずし字」を位置づけるのは果たして正しいのでしょうか。

教科教育の視点から言えば、「くずし字」は、国語以外の教科とも関わっています。文字入りの絵（日本には多い）例えば絵入り本や画賛（がさん）は美術と関わります。本草書（ほんぞうしょ）は生物（医学・薬学）、天文書は地学と、料理本は家庭科と、地域文書は歴史と関わっています。多くの場合、それは特別な古文力を必要とはしません。辞書さえあれば十分理解可能

なものがほとんどです。「くずし字教育」の前に、文語教育・古文教育をというのは一面では正しいですが、まずは歴史的典籍に直接触れて、読んでみることも大事です。これは、外国語教育で、単語や文法をみっちりやってから実際に使ってみるという手順を踏むよりも、外国語を母語とする人と会話することで実践的な外国語会話が身についしまうことが往々にしてあることを思い浮かべていただくとよいでしょう。「くずし字」を読むとは、未翻刻の資料を読むことであり、それは自分が出会ったことのない世界に飛び込む、ワクワク感いっぱいの営為なのです。

さらに「くずし字」で書かれた資料が、現代人の問題・関心にもヒントを与えることがあります。歌舞伎や茶道など伝統芸能に興味を持つ人は、「くずし字」を学ぶことで、より知識を深めていくことができます。近年、刀剣がブームとなっていますが、刀剣の由来やエピソードを知りたい時、展示されている刀剣の横に参考として並べられている由緒書（ゆいしょがき）を読みたい時、「くずし字」リテラシーが役に立つのです。現代人にとって深刻な問題である地震などの災害や感染症。それらにどう対応すればよいのか。例えば地震のデータ測定記録は、ここ何十年分しかなく、大地震に伴う津波のあり方や、特定の地域に発生した地震の記録が、歴史的文書の中にしか見いだせないことがあります。先に述べた古地震研究会の古文書解読への取り組みは、最も現代的な課題に「くずし字」解読スキルが関わるという実例です。また、現代人が経験したことのなかった、長期にわたる感染症の流行に対して、過去の人々がどう対処していたかを探るには、歴史的典籍に頼るしかありません。

つまり、「くずし字」文献は、「古文」という国語の教材だけではありません。あらゆる教科・教養・趣味への入口になり、それらを深く、広く学ぶための材料となります。もっと自由に考えてよいのです。人が関心を示す対象は、それへの興味、身近さ、自分自身との関わりのあるもの、つまり「既知」のものです。一方、未翻刻（みほんこく）の「くずし字」文献とは、過去のテキストでありながら、今まで出会ったことのない「未知」のものです。数多くの「未知」の文献の中から、教材としては、身近で、興味の持てる「くずし字」文献を選ぶべきでしょう。それは万人に共通していないわけだから、

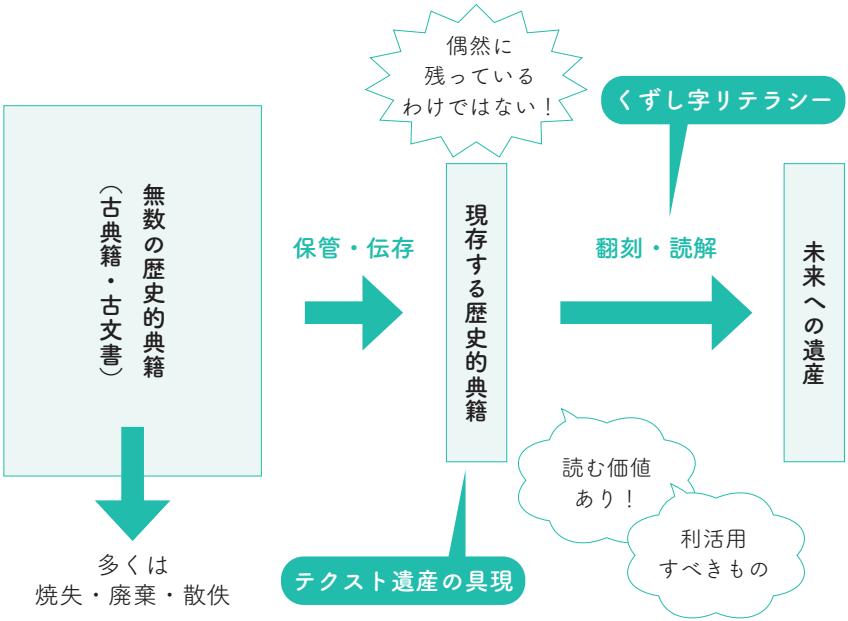
学ぶ個人あるいはグループ向けにそれぞれ選ぶと、より効果的でしょう。

例えば、くずし字への興味の糸口を提供する例として、安永九年（一七八〇）刊行の市場通笑作の黄表紙『浦島太郎二度目の龍宮』をあげてみましょう。浦島太郎は誰でも知っている「既知」のキャラクターですが、その浦島太郎が、もう一度龍宮に行ったという話はほとんどの人にとって「未知」に違いありません。これはいわゆる二次創作です。しかも、絵が主体でストーリーが追いやすいのです。字だけのテキストよりも、「読む気」が起きるのではないでしょうか。

④「くずし字教育」への疑問に答える3　こういう疑問もあるかもしれない。「くずし字を一度習得しても、すぐに忘れるのではないか。一過性に終わるくらいなら、やらなくてもいいのではないか？」と。一理あります。しかし、一度でも「くずし字」学習経験があれば、次に「くずし字」に出会った時にスルーしない可能性が高いと思います。一過性でもいいから一度経験しておくことが重要です。一度の経験は無限の可能性を秘めています。

5　結語

「テクスト遺産」の具現としてのくずし字文献　テクスト遺産とは、エドアルド・ジェルリーニさんが提言する概念です。ジェルリーニさんは言います。「critical heritage studies（批判的遺産研究）の視点から考えてみると、遺産はモノではなく、社会的かつ文化的営為であるのと同様に、文学遺産（飯倉注「テクスト遺産」）も、文学作品そのものではなく、むしろその作品をめぐる様々な社会的過程であると主張すべきだろう。したがって、有形的に存在している文学作品は、文学遺産という無形的な営為の具現に他ならない」（エドアルド・ジェルリーニ「投企する文学遺産―有形と無形を再考して」、『古典の未来学』文学通信、二〇二〇年）。現在残っている「くずし字」文献は、過去の「テクスト遺産」



の具現です。そして「くずし字」解読は過去を未来につなぐ営為そのものなのです。

現存する歴史的典籍は、過去に存在した無数の歴史的典籍のうち、後代に伝えるために保管されて伝存しているものであり、偶然に残っているわけではありません。人が遺産として後代に残そうとして関わらなければ残らなかったテクスト遺産の具現です。現存する歴史的典籍とはつまり読む価値のあるものであり、利活用すべきものです。そのためには、テクストを読解する「くずし字」リテラシーが必要です。私たちは、それでこそ未来へと遺産をつなぐことができるのです。以上、私の主張をまとめてみたのが上の図です。